

【第10回草原環境学習小委員会議事概要】

- ・ 日時：平成22年2月17日（水）14:00～16:00
- ・ 場所：大阿蘇環境センター「未来館」会議室B（RDF棟）
- ・ 出席者：委員11名、事務局9名、計20名

1. 開会

2. 議事

1) 草原キッズ・プロジェクトについて

○前回小委員会の議事概要について－事務局より説明

◇熊本県環境センターへの講師登録について

- ・ 環境センターの講師登録について、モデル校として集中的に活用するのは無理でも、将来的には学校自身でやる時に使ってもらえばいいので、登録を止める理由はない。
- ・ 学校がプログラムを組み立てるなかで、学校が選べるような仕組みを作るのが目標。学校から要請があった時に、環境センターが年一回なら派遣できることを紹介すればコーディネーターの役割は終わるので、そういう体制を作ることが大事。
- ・ 登録は早く進めた方がいい。肩書きは草原学習小委員会を出していいのか。
(委員長)：そのあたりも聞いていただき、登録は進めていく方向でお願いしたい。

①第9回小委員会開催以降のワーキンググループ開催状況

○資料1：第9回草原環境学習小委員会以降のワーキンググループ開催経緯－WG事務局より説明

②モデル校におけるプログラム実施状況

○資料2：平成21年度2・3学期 碧水小学校5年生を対象としたモデル校プログラム進捗報告－WG事務局より説明

◇来年度プログラムについて

- ・ 今年度は興味を持ってもらうのが一番だった。今後、野焼きを体験して人が関わっていることを知ってもらった上で、来年度は人と草原の関わりの方について深く進めていく。子供たちの興味が現状や危機的状況などの問題点に目がいくように誘導しつつ、最後は草原の草の利用まで進め、野草紙の卒業証書で卒業ということにしたい。
- ・ いくつかステップがあり、今は草原でいいな、知りたいなというところ。そこから何で草原になっているのかということに進む。草原がどのようにして守られているかを調べていく中で、自分達で何ができるのかを考え、その一つとして野草紙を作ってみようということで、最後は自分たちの行動で何をするのかということに持っていく。
- ・ インターネットTVは、全国の小学校5年生に見てもらい、返ってくることを期待しており、草原について聞かれたことを自分たちで調べるということをやっていく。

◇汎用性のあるプログラム開発について

- ・ モデル校プログラムは今後のベースになっていく。全体のフローに対して、1つでなくても構わないが落とし所を作っていく必要がある。
- ・ 碧水小学校のように子供たちの自主性を大事にして調べさせるやり方ができる先生は少ない。

このパターン以外にも、1年を通した教科書的なプログラムを作る必要がある。

- ・ 教員は指導要領がないと動かないので、副読本や教材が必要。
- ・ 学習のねらいとして、どこに落とし所を持っていくかが大事。1時間ごとや週ごとの指導案、スケジュールや単元計画といった現場の手法を我々も勉強し、時間ごとの目的や最終的に何を気付かせるかということについて意思疎通が必要。学校によって地域性が違うが、子供たちにどう知らせるかを押さえていけば対応できるだろう。
- ・ パッケージ化されたプログラムであればあるほど、1時間当たりの展開案を書く必要がある。来年度は、先生方も交えて話を進めないと私たちだけでは理想論になってしまう。学校ごとの現状に合わせて、最低でもこの部分だけはやってもらいたいという、ピンポイントで扱えるような時間数も必要。

◇プログラムの流れの軸を作る

- ・ 今モデルプログラムでやっている中で、どういったフローで作っていくのか、道具を作るにあたってもキッズプロジェクトの軸を作っておかないといけない。草原に関心を持ち、好きになって、草原維持の仕組みを知る、危機を知って、自分達にできることを考えるというような形を、我々として持たないと個々の道具立てができない。今回のプログラムは先生が関心を持ってやってくれたので、流れとしては自信を持っていい。プログラムを検証して、より多くの先生にやってもらえるよう道具立てを考えていけばいい。

(委員長) モデル校プログラムは思惑通りに進んでいると思うか。

- ・ 子供たちがステップを上がって行っている感じがすれば、良い順番で並んでいるということ。
- ・ 興味は持ってくれている感じはする。

(委員長) 初年度としては良くできていると思う。これを検証してバージョンアップさせていく作業が必要である。

◇草原の危機をいかに伝えるか

- ・ 来年度、草原の危機に子供たちをひきつけていくステップが難しいと思う。
- ・ 草原の危機については難しい。改良草地と自然草地の違いや、生業としてなぜ牛飼いが成り立たないかを経済的観念として教えなくてはならない状況に追い込まれるので、何をどこまで教えるのかという設定を最初に考えておく必要がある。
- ・ 危機を知らせるのは非常に難しいことだが、我々としてはなんとかやりたい。その時点で学校では何を教えているのかというところにもかかってくる。
- ・ 社会科的な切り口で、産業構造の問題や需要供給のバランスなどをいかに掘り下げるか。教育の世界では政治を持ち込むのを嫌うため、どう改善すべきかというところが難しい。
- ・ 今は熱心な先生がいるので、どれとつなげたら分かりやすいかを計るのは今のうち。
- ・ モデル校の先生にはワーキングに参加してもらえるといい。

(委員長) 学校の先生の見聞も聞いた中で作って行くことは大事である。

- ・ ストーリー性を持たないといけないと思う。草原の価値をいかに知らしめるか、価値が分からないと危機も分からない。阿蘇の草原は集落と人々の営みによって保たれているが、いま崩れかけている。今残っているものには重要な価値があるから残さなくてはならないというところで共通認識としなくてはならない。今年度の落とし所を来年度の危機の部分につなげていく必要がある。

③ショートスクール実施状況

○資料1(3)：ショートスクール実施報告－国立阿蘇青少年交流の家／紫垣氏より説明

◇野焼き体験について

- ・ 小堀牧野には3月の全体の野焼きの前、2月に別途火入れ許可申請を出していただくので有り難く思っている。安全面に気を付けて牧野に迷惑のかからないように運営したい。
- ・ 牧野の人数が6人しかいないので、参加人数を増やしても目が届かない。父兄も初心者である。現在85人なので1人が10人くらいを見ることになる。
→グリーンストックにも1班に1人ついてもらうような形で、10人お願いしている。
- ・ 牧野の人は一番前の火付けと、最後に鎮火を確認する人。その間で何班に分かれるか。
→その辺りは牧野の指示を仰いでやっていく。
- ・ 楽しんでもらうことも必要。楽しかったことと怖かったことはどちらも勉強になる。

④個別プログラムの実施状況

○資料1(4)「平成21年度キッズプロジェクト 個別プログラム実施状況」

－WG事務局より説明

◇九州バイオマスフォーラムによる活動について

- ・ 放課後子ども教室では、放課後から下校までの1時間という短い時間に紙漉きを行うため、草原学習がほとんどできなかった。卒業証書のプログラムでも学校側がなかなか時間が取れず、こちら任せになり学校側とのすり合わせはほとんどできなかった。このプログラムを実施して3年目の今年は、学校教育に取り入れてもらうため、紙芝居を使って指導者を育成することが目標だった。九州バイオマスフォーラム単体では学校にプログラムを持って行くのは難しいので、キッズプロジェクトに参加して、学校に取り入れてもらう形が良いと思った。(委員長) 事前に学校側と打ち合わせはしているのか。
- ・ 打ち合わせはするが、任せると言われてしまう。卒業証書は今年4校に増えたが、スタッフの問題もあり小人数の学校しか対応できない。大人数の学校を草原に連れて行くのは難しい。現地でカマを使って作業をするので目が行き届かない。
- ・ カマなど使い方の指導をきちんとし、子供たちに危険性を認識させる。なぜそれをするのかということ、草原の景色や動植物を見せながら話すことが効果的である。

2) 草原環境学習関連の活動の実施状況について

- ・ 例年通り、草原新聞とカレンダーを発行した。ぬり絵コンテストも結構集まるようになっており、ビジターセンター等で展示を行っている。今年度は情報発信資料の効果について学校等にヒアリングをしている。(九州地方環境事務所)
- ・ グリーンストックでは、活動計画案の表に入っている以外で、県外の小中学生の受け入れがあり、その時に草原に連れて行ったり、あか牛の触れ合い体験などを行っている。草原での体験をしたいという大学からの要請もある。(阿蘇グリーンストック)
- ・ 博物館の事業である火山体験学習は、平成21年度の参加者が現時点で約6600人。内訳は熊本市内の中学生が約2900人、長崎からの小学生が1600人、その他、関東からの中学生、高校生を含め、体験活動をやってもらっている。(阿蘇火山博物館)

3) 阿蘇草原再生に向けた新規活動計画案について

○資料2「新規活動計画案」一事務局より説明

○主に担当する新規計画案12件について、提出者より説明

◇「モデル校における年間プログラムの実践」について

- ・実施校について、坂梨小学校にはまだ具体的な話をしていないので、他1校というかたちにして欲しい。

◇費用について

- ・取り組みとしてはレベルが高いが、問題はお金の面で、明記してある場合とない場合がある。火山博物館のように生業としてやっている所との住み分けはどうするのか。金額に対する質問があった時にどう対応するのか。

(委員長)：今のところは各事業主体の中で考えるしかないが、近い将来、熊本県環境センターの講師派遣や協議会の募金の方からバックアップが可能になるかもしれない。

- ・いずれにせよ、委員会として受け入れるということは、その団体を信用することが前提。立ち上げのときにも営利目的の団体を受け入れないというのがあった。
- ・体験だけでお金をとって学習効果がなければ、草原環境学習にはならない。
- ・学習ということがキーワードで入っていて、その場合は営利でも非営利でもいい。

◇草原キッズプロジェクトとして位置づける活動、新規活動計画案の承認

(委員長) 草原キッズプロジェクトに位置づけるかどうかを明確にしておく必要がある。

- ・草原キッズでやる場合はどこかに特記事項として書いておいた方が分かりやすい。
→今までの考え方では、実施主体が草原キッズとしてやりたいと言って、この場でそれを確認して協議会にあげるという手順である。この場でキッズ・プロジェクトとしてやりたいものを言っていて、確認をとったほうがいい。(事務局)

(委員長) 草原キッズプロジェクトに位置づけていいと思うものを挙げて欲しい。

- 草原環境学習 出前講座の実施－阿蘇グリーンストック
- 「阿蘇の草原キッズ」～草原のひみつをさぐる～【野焼き編】－国立阿蘇青少年交流の家
- 「阿蘇の草原キッズになろう！」【秋編】【野焼き編】－同上
- 出前講座：阿蘇の草原を未来へつなごう－九州地方環境事務所
- モデル校における年間プログラムの実践－同上
- 阿蘇草原再生に関する情報発信資料の作成－同上

(委員長) 以上について草原キッズ・プロジェクトとして実施するという事とする。それでは、10件の活動計画案について、本小委員会では承認してよろしいか。

→拍手で承認

○関連する活動計画案について－事務局より説明

◇「GISによる草原自然環境マップの作成・管理講習会」について

- ・営利的な講習会に近い感じがするので、実施主体をNPO法人にした方がいい。GISはソフトの更新などお金がかかる。また、講習費の2万円は高いので精査した方がいい。
- ・環境省のデータを公開していいものか。

→データは使わなくては意味がない。環境省では皆さんに使っていただきたいので、講習会などはあってもいいと思う。ベースマップで希少種以外のものなら提供できる。指摘があったように営利的な部分があるのなら、そこは検討する。

- G I Sに詳しい専門家に入ってもらって見極める必要がある。研究のツールとしてはかなり有効だが、どうしてもソフトの維持管理に金がかかる。

(委員長) 生物多様性小委員会の活動計画案なので、今後事務局を中心にきちんと見ていってほしい。なるべく営利的なものにならないようにしてほしい。

→NPO法人としての提出が本小委員会の意見ということで伝える。(事務局)

4) その他ー事務局より今後のスケジュールについて説明

3. 閉会

以上